



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Thursday 17 May 2001 (afternoon)

Jeudi 17 mai 2001 (après-midi)

Jueves 17 de mayo de 2001 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。

(コメンタリーを書きなさい。)

1 (a)

私は幼稚園のときから、もうふらふらと道をかえて、知らない街ぐさまよいこむような悲しさに憑かれていたが、学校を休み、松の下の方の葎の藪陰にねて空を見ている私は、虚しく、いつも切なかった。

私は「家」に怖れと憎しみを感^{かん}じ、海と空と風の中にふるさとと愛を感じていた。それはしかし、同時に同じ物の表と裏でもあり、私は憎み怖れる母に最もふるさとと愛を感じており、海と空と風の中にふるさとの母をよんでいた。常に切なくよびもとめていた。だから怖れる家の中に、あの陰鬱な一かたまりの漂う気配の中に、私はまた、私のやみがたい宿命の情熱を托しひそめてもいたのであった。私もまた、常に家を逃れながら、家の一匹の虫であった。

私の家から一町ほど離れたところに吉田という母の実家の別郎があった。ここに私の従兄に当たる男が住んでおり、女中頭の子供が白痴であった。私よりも五ツぐらい年上であったと思う。

小学校の四年のとき白痴になったのであるが、そのときは暮が四級ぐらいで、白痴にならなければ、いっばし暮打ちの専門家になれたかも知れない。白痴になってからは年ごとに力が衰え、従兄に何目か置かせていたのが相先になり、逆に何目か置くようになっていた。白痴は強情であったが臆病であった。この別郎の裏は刑務所だが、暮を打ってお前が負けたら刑務所へ入れるとか、土蔵へ入れると言って脅かす。白痴の方では何年前には何目を置かせて打っていた自信が今も離れないから、せせら笑って（全くせせら笑うのである。呆れるばかり一徹で強情であった）やりだすのだが、白痴の方は案に相違、いつも負けてしまう。はてな、と言って、石が死にかけてから真剣に考えはじめ、どうして自分が負けるのか原因がわからなくて深刻にあわてはじめる、それが白痴の一徹だから微塵も虚構や余裕がなくて勝つ方の愉しさは察せられるものがある。けれども従兄はそれだけで満足ができないので、本当に土蔵へ入れて一晩鍵をかけておいたり、裏門から刑務所の畑の中へ突きだして門を閉じたりしたものだ。白痴は一晩ヒヒヒ泣いて詫言^{わごころ}びている。そのくせ懲りずに、翌日になると必ずせせら笑ってやりだすので、負けて悄然今日だけは土蔵へ入れずに許してくれ、ぐいつくばって半あやまりにあやまるあとでせせら笑って、本当は負けるはずがないのだと呟いて、首を傾けて考えこんでいる。

毎晩負けて土蔵へ入れられる辛さに、とうとう家出をした。街のゴミタメを漁って野宿して乞食のように生きており、どうしても押まらなくなり、一年ぐらい彷徨しているうちに、警察の手で精神病院へ送られた。そのときはもう長の放浪で身体が衰弱しており、冬の暮れ方、病院で息をひきとった。

35

それはまだ暮れ方で、別邸では一家が炉端で食事を終えたところであったが、突然突風の音が起こってまず入り口の戸が吹き倒れ、突風は土間を突きぬけて炉端の戸を倒し、台所から奥へ通じる戸を倒し、いつも白痴がこもっていた三畳の戸を倒して、とまった。すべては瞬間の出来事で、けたたましい音だけが残っていた。それは全くある人間の体力が全力をこめて突き倒し蹴倒して行ったものであり、ただその姿が風であって見えな

40

いだけの話であった。そこへ病院から電話で、今白痴が息をひきとったという報告があったのである。

私は白痴のゴミタメを漁って逃げ隠れている姿を見かけたことがあった。白痴の切なさは私自身の切なさだった。私も、もしゴミタメをあさり、野に伏し縁の下にもぐりこんで生きていられる自信があるなら、家を出たい、青空の下へ脱出したいと思わぬ日はなかった。私はそのころ中学生で、毎日学校を休んで、晴れた日は海の松林に、雨の日はペン屋の二階にひそんでいたが、私の胸は悲しみにはりさけないのが不思議であり、

45

罪と怖れと暗さだけで、すべての四囲がぬりこめられているのであった。青空の下へ！自分一人の天地へ！私は白痴の切なさを私自身の姿だと思っていた。私はこの白痴とは親しかった。私は雨の日は別邸へ白痴を訪ねて四目置いて書を教えてもらうことがたびたびあったのである。

50

ゴミタメを漁り野宿して犬のように逃げ隠れてどうしても家へ帰らなかった白痴が、死の瞬間の霊となり荒々しく家へ戻ってきた。それは雷神のごとくに荒々しい帰宅であったが、しかし彼は決して復讐はしていない。従兄の鼻をねじあげ、横ッ腹を走るついでに蹴とばすだけの気まぐれの復讐すらもしていない。彼はただ荒々しく戸を蹴倒して這入ってきて、炉端の人々をすりぬけて三畳のわが部屋へ飛びこんだだけだ。そしてそこで彼の魂魄は永遠の無へ帰したのである。

(坂口安吾『石の思い』一九四六年)

坂口安吾（一九〇六～五五） 小説家。

1 (b)

水の精神

水は澄んでいても、精神^{ミコ}ははげしく思い惑^{まよ}っている。
 思い惑って揺れている
 水は気配を殺^{ころ}していたい それだのにときどき声をたてる
 水は意思を鞭^{むち}で打たれている が匂う 息づいている
 5 水にはどうにもならない感情がある
 その感情はわれている 乱れている 希望^{きぼう}が失くなっている
 だしぬけに傾く 逆立ちする 泣き叫ぶ 落ちちらばう
 ーともすればそんな夢から覚める。
 そのあとで いっそう佳しい色になる
 10 水は心をとり返したいとしきりに祈る
 祈りはなかなか叶^{かな}えてくれない
 水は訴えたい気持ちで胸がいっぱいになる
 じっさい いろんなことを喋^{しゃべ}ってみる が言葉はなかなか
 意味にならない
 15 いったい何処から湧いてきたのだろうと疑ってみる
 形のないことが情ない
 やがて憤^{いらい}りは重^{おも}なってくる 膨^はれる 溢^{あふ}れる 押さえきれない
 棄鉢^{すいばち}になる
 けれどやっぱり悲しくて 自分の顔を忘れようとねがう瞬間
 20 ーー忘れたと思った
 水はまだ眼を開かない
 陽が優しく水の臉^{また}をさすっている

(丸山 薫『水の精神』 昭和九年)

丸山 薫(一八九八〜一九七四)詩人。代表作に、『詩と詩論』『物象詩集』などがある。